

第19回福山教育フォーラム分科会（概要）
～分析データを活用した授業改善実践校事業～

1 「学力の伸びを把握する調査」について（P1～）

○「学力の伸びを把握する調査」がどのように作られているか

- ・ 「全国学力・学習状況調査」と何が違うのか。「学力レベル」「学力の伸び」とは何か。

2 パイロット校の取組〔調査結果の分析・活用例〕（P4～）

学校名	帳票	取組
南小	40	子ども一人一人の学力の伸びや非認知、学習方略の状況を把握し、個への支援につなげている。
箕島小	1・2	児童一人一人の個票を作成し、伸びている児童からその理由を直接聞き取った。今後、それらを基に教職員全体で、授業改善につながる要因を探っていく。
川口小	26・40	階層ごとの児童の伸びの状況を把握し、個々の支援、学校全体での取組を考えている。
城南中	42	前年度在籍学年・学級を基準にした学力の伸びから、各学級及び各教科担当者の一覧表を作成し、管理職が教職員との面談、授業観察を行い、一人一人が取り組むことを明らかにした。

3 協議〔自校の調査結果（R3）を踏まえ、今年度の結果のどこに着目するか〕（P12～）

～学校からの意見・質問～

- ・ 友だちと学び合う中で、人的リソース方略を高めていきたい。
- ・ 子ども同士や教員に分からないところを尋ねるといった質問項目を含んでいる人的リソース方略、認知方略について、2つの数値は高い方がいいのか。

～澤 尚幸さん（福山市政策アドバイザー）より～

- ・ どちらかという主体的に学ぶということに関係するのは、プランニング方略や努力調整方略。
- ・ 人的リソース方略が高いと人に頼ってしまうという要素もあり、マイナスの作用もあるが、学力低位の子にとっては友だちから聞いて学ぶ環境が必要な場合がある。
- ・ 個々の状況や学力レベルに応じて、どの学習方略に着目するかを考えることが重要。

4 講話「子ども一人一人の伸びを大切にするために～『学力の伸びを把握する調査』の活用～」（P13～）

講師：栗山 和夫さん（文部科学省初等中等教育局財務課長補佐）

- ・ 毎年度の学力や非認知能力等の伸び、推移を明らかにすることで、子どもの特性を踏まえた個別の接し方や支援等の経験とデータを往還させ、日々の指導に活かす。
- ・ 調査結果から、教師自身が、自分なぜ子どもの力を伸ばせたのか、どのような指導をしていたのか等、自分の指導を見つめ直し、メタ認知することで、学び合うきっかけにする。